

マタイ 5:17-20 「キリスト者の義」

聖句

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っではならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」

わたしには、イエスキリストがいない、という人がおります。キリストなしで、自分でやっていくことができますから、けっこうです、というわけです。

「いいえ、けっこうです。キリストなしで、やっていけます」

この「けっこう」という言葉を辞書で調べてみますと、こういう意味があります。

- ・すぐれていて欠点がないさま。

「けっこうです」というのは、欠点がひとつもないということです。

- ・それでよいさま。満足なさま。

「けっこうです」というのは、わたしはとても満足しているということです。

- ・それ以上何も必要としないさま。

「けっこうです」というのは、必要をまったく感じないということです。

主イエスキリストが救い主としておいでになったとき、主イエスに向かって「いえ、けっこうです」と言った人々がいました。それが、ファリサイ派の律法学者たち。今日で言うところの聖書研究者たちでありました。

当時のユダヤ人の宗教においては、「神さまの御心を完全に満足させるには、どうしたらよいか」ということに、大きな努力が払われていました。わたしたち人間が、神様の御心を、ひとつも欠点がないほど、きちんと行なうには、どうしたらよいか。わたしたち人間が、神様の御心を、「ああ、おまえは、それでよい」と神様からおっしゃっていただけるまでに、完全に満足させるには、どうしたらよいか。

このことにおいて、非常に抜きん出た努力を重ねていたのが、ファリサイ派の律法学者たちでありました。

律法学者たちは、聖書の中でも、預言者モーセが書いたとされる五つの書。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の中に、神様の御心が完全な私たちで表わされている、と考えていました。これら五つの書はひとまとめにして「律法」と呼ばれます。そこには、600ものおきてが示されていたのです。

これらのおきてを守ろうと努力することにおいて、ファリサイ派の律法学者たちは、異常とも言える熱意をもって、取り組んでおりました。

律法に、「安息日には働いてはならない」というおきてがあります。律法学者たちは、安息日である土曜日に、いかなる仕事もしなかったのはもちろんですが、さらに、こう考えたのです。いったい、ポケットにハンカチを入れて歩くことは、ハンカチを運ぶという労働になるのではなかろうか？

神様の御心を、完全に、ひとつも欠けることなく行ないたい、と願う律法学者たちは、この問題について真剣に議論しました。ある律法学者が、こう結論しました。ポケットの中のハンカチを安全ピンで服の内側に止めなさい。そうすれば、ハンカチは服と一体化するので、ハンカチを運ぶという労働をしたことにはならない。

これほどの努力を重ねて、神様の御心を、完全に、ひとつも欠けることなく行ないたいと願い、実行していたファリサイ派の律法学者たちは、なみなみならぬ自信を持っておりました。

ですから彼らは、主イエスキリストがおいでになったとき、「いったい、なにしに來たのだ？」と、冷たくあしらったのです。

けっこうです。わたしは、神様の御心を完全に満足させていますから。

けっこうです。わたしは、神様の御心に従って生きていますから。

イエス様、あなたの助けは、わたしにはまったく必要ありません。

けっこうです。というわけです。

しかし、イエス様はおっしゃいました。あなたがたは、外側はけっこうだが、心の中は、そうではない。

福音書記者マタイは、イエス様が口をきわめて律法学者たちを批判なさった言葉を、詳しく書き留めています。それが、マタイによる福音書第 23 章に記録されています。イエス様はこうおっしゃっています。

「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている」(マタイ 23:25-28)

外側の行ないが、たとえ立派に見えても、外からは見えない心の中にこそ、本当の問題があるのだ、とイエス様は指摘なさいました。

心の中の問題。これを明らかにするために、イエス様は、マタイによる福音書第 5 章から 7 章に収められている「山上の垂訓」すなわち、山の上での説教を語られたのです。

「地の塩、世の光」(マタイ 5:13-16) の段落では、たとい、外目に見て塩のように白くてさらさらしていても、もし塩味がなかったなら、なんの意味もない、と言われてしています。たいせつなのは、塩のような外見ではなくて、塩味がするかどうかという本質だ、ということです。律法学者たちは、外見はけっこうでしたが、本質が、つまり、心の中が、問題だったのです。

「腹を立ててはいけない」(マタイ 5:21-26) の段落では、たとい、誰ひとり殺したことがないとしても、誰かのことを「馬鹿」とか「能無し」とか思っているとしたら、それは、誰かを殺したのと同じことになる、と言われてしています。たいせつなのは、やはり、心の中で何をどう思っているか、ということなのです。

「姦淫してはならない」(マタイ 5:27-29) の段落では、たとい、不倫関係を持ったことないとしても、誰かに対して情欲を抱くならば、それは、罪を犯したことになる、と言われてしています。たいせつなのは、やはり、心の中で何をどう思っているか、ということなのです。

イエス様は、心の中を問題にされます。あなたは、本当はどういう人間なのか。そこを、イエス様はご覧になっているのです。

心の中の問題をそのままにしておいても、わたしたちは外側を、ある程度立派に見せることができます。これは、外側の行為における正しさであって、「ファリサイ人の義」と呼ばれるものです。

自分の心の中に問題を抱えながらであっても、わたしたちは人に対して施しのわざをすることができます。しかも、みんなの見ているところで施しをすることによって、誉めてもらえることを、期待するのです。誉められるときに、わたしたちは、自分の心の中の問題が解決していないにもかかわらず、一時的に問題を忘れてしまうことができます。「施しをするときには」(マタイ 6:1-4)の段落には、そういう誘惑があることが、示されています。

自分の心の中に問題を抱えながらであっても、わたしたちはお祈りすることができます。しかも、みんなの見ているところで立派なお祈りをするによって、誉めてもらえることを、期待するのです。誉められるときに、わたしたちは、自分の心の中の問題が解決していないにもかかわらず、一時的に問題を忘れてしまうことができます。「祈るときには」(マタイ 6:5-8)の段落には、そういう誘惑があることが、示されています。

ファリサイ派の律法学者の中でも、人一倍熱心に努力していたサウロという人がおりました。サウロは、自分の熱心さについて、こう記しています。

「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」(フィリピ 3:5-6) サウロは「けっこう」だったのです。

ところが、サウロの目からウロコが落ちる日が来ました。それまで自分は、神様の御心を満足させたいと願って、熱心に努力して来たのです。ところが、心の中の問題がまったく解決していないことに、サウロは、はじめて気が付いたのです。

気が付いた瞬間サウロは、神様の前で、ほんとうは自分がどんな状態なのかを、知ったのです。サウロは、自分のほんとうの姿を、こう告白しています。「わたしはなんと惨めな人間なのだろう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるだろうか」(ローマ 7:24)

心の中の問題に気が付いて、はじめてサウロは、「ぜんぜん、けっこうではありません。イエス様、わたしには、あなたが必要です」という信仰に至ることができました。

サウロは、ファリサイ人の義にまさる「キリスト者の義」を見出しました。それが、あまりにもすばらしいものだったので、サウロは名前をパウロと変えた上で、こう叫ばずにおれなかったのです。

「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります」(フィリピ 3:8-9)

この「キリスト者の義」は、信じる者すべてに与えられるものです。

それは第一に、「主イエスキリストが十字架にかかって、わたしの罪の身代わりに死んでくださった」と信じることです。わたしたちが、信仰をもってこれを受け取るとき、わたしたちが外側の行ないにおいて犯した罪ばかりでなく、わたしたちが内側で、心の中の思いによって犯した罪をも、赦していただくことができるのです。

それは第二に、「主イエスキリストが復活なさって、聖霊を通してわたしの中に生きてくださる」と信じることです。わたしたちが、信仰をもってこれを受け取るときに、主イエス様が、わたしたちの心の中に入ってください、わたしたちの中で生きてくださり、新しい命で満たしてください、内側からわたしたちを生かしてください、ということです。

わたしたちは、自分が「けっこう」ではないということを、認めているでしょうか。わたしたちの罪を赦すために十字架にかかれた主イエスキリストを信じているでしょうか。復活された主イエスキリストが、聖霊を通してわたしたちの心の中に宿ってくださり、わたしたちを内側から生かす命となっていてくださる、ということを信じているでしょうか。このように信じてこそ与えられるのが、「キリスト者の義」です。わたしたちは、それを、すでに信仰によって受け取っているでしょうか。お祈りいたしましょう。

祈り

恵み深い天の父なる神さま。

わたしたちの本質的な問題は、心の中にあり、イエス様は、わたしたちの心の中をいつも見ていてくださることを、感謝いたします。

わたしたちは、自分の心の中のあれやこれやの問題を、自力ではどうすることもできません。まったく処置無しであり、あなたの前で白旗を挙げて、降参するほか、ありません。

あなたは、わたしたちの心の中の問題を解決してくださるために、あなたのひとり子、主イエスキリストを与えてくださいました。心から感謝いたします。

主イエスさまは、わたしたちの罪、すべての罪を身代わりに背負って、十字架にかかってくださいました。イエス様の身代わりの死によって、わたしたちが外側で犯した罪ばかりでなく、心の中で犯した罪をも、赦して頂けることを、感謝いたします。

どうか今日、イエス様の十字架による罪のまったき赦しを、わたしのこととして受け取り、わたしのものとして経験することができますよう、信じる心をお与えください。

また、主イエス様は、三日目に復活して、わたしたちを生かす霊となり、わたしたちの心の中に入ってください、新しい命でわたしたちを満たし、わたしたちを内側から生かしてくださることを、感謝いたします。

どうか今日、「生きているのはもはやわたしではなく、キリストがわたしのうちに生きている」という、キリストとの結合を、わたしのこととして受け取り、わたしのものとして経験することができますよう、信じる心をお与えください。

すべては、信仰から始まり、信仰を経て、さらなる信仰へと進みます。どうか、信仰によって、この「キリスト者の義」を、わたしたちの今この時、今この瞬間における経験として、与えてください。

主イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。アーメン。